

我々が何かを視界に捉えた時、視界の右半分の映像は左脳に、左半分の映像は右脳に送られて情報処理される。脳内で処理された様々な情報に意味合いを持たせる「解釈機能」は左脳に位置しているが、左右の脳は脳梁という部位でつながっているため、映像解釈時には左右両方の脳の情報が問題なく活用される。では、この左右の接続が断たれた場合、一体何が起ころのだろうか？

脳科学者ガザニガは、左右の大腦半球をつなぐ脳梁が離断されている患者に対して、左脳（右視野）に「ニワトリの足」、右脳（左視野）に「雪景色」の絵を見せ、続いて

ショベルを使うから」と淀みなく答えたのである。

この実験で観測された、自覚されぬまま正しく行われる右脳側の挙動、そして自身が持つ情報のみから右脳側の行動理由をでっち上げ本人の意思だと認識させる左脳の働きは、「我々は自分の意思で行動している」という当然の感覚に大きな疑問を投げかける。実は脳は細かい部位毎に専門的な処理機能を有しており、「表情の見分け」や「道徳的な判断」のような後天的とも思える能力にも専用の機能部位が存在している。こうした脳の機能群が意識外で独自に動いており、その処理結果に対して行わ

数 | 理 | の | 窓

あなたが見た「雪景色」を
私は知っている



別の複数の絵を提示して最初の絵と関連するものを選んでもらうという実験を行った*。左右の脳はつながっていないため、一方の脳はもう一方の脳にある情報や機能を利用することはできないが、患者はニワトリの足を見た左脳が司る手（右手）で「ニワトリ」の絵、雪景色を見た右脳が司る手（左手）で「雪かきショベル」の絵を正しく指し示すことができた。ところが、最後になぜその絵を選んだのかと質問すると、解釈機能が存在する左脳が選んだニワトリについては「最初の絵がニワトリの足だったから」という真っ当な答えが返ってきたものの、解釈機能がアクセスできない右脳が選んだ雪かきショベルに関しては、患者は雪景色に言及することなく、理由が分からないと戸惑うこともなく、「ニワトリ小屋の掃除に

れる後付けの辻褄合わせが意思の正体なのだ。我々が何かを決意する前に、脳は既に決定を終えているのである。

我々の意思は我々が思うほど自由ではないのかもしれない。一方、意思が脳の各専門機能部位の活動結果だとしたら、「人の脳の構造上好まれがちな思考パターン」といったものが存在していても不思議ではない。例えば、互いに無関係な文化から生まれたギリシャ神話と古事記の内容が驚くほど似通っていることは、もしかしたら人類の脳構造が生む思考の偏りの表れなのかもしれない。宇宙人が人類の学問や思想に触れたら、「なぜこの種は皆奇妙な考え方をするのか」と訝しがるだろうか。（須貝 悠也）

* <わたし>はどこにあるのか ガザニガ脳科学講義, 2014, 紀伊国屋書店